

Emily Brontë の 研 究

—I am Heathcliff—

宮 川 下 枝

私は前回及び前々回の〔英文学研究〕に於いて Emily Brontë (エミリー・ブロンテ) の作品 *Wuthering Heights* (嵐が丘) 中の描写, 更に彼女の死生観を研究した関係上, 今回は更に一步進めて “I am Heathcliff!” なる言葉によって表明される彼女の愛の本質論へと及んでみたい。「嵐が丘」全篇を貫くテーマこそ, この “I am Heathcliff!” という確信に満ちた信念である。

“I am Heathcliff!” (私はヒースクリフと言ってもいい位よ。) と「嵐が丘」の女主人公 Catherine (キャサリン) は叫んでいる。ブロンテはキリスト教の信仰を持っていたとは云われていない。彼女のもつ信念は彼女独特のもので, より神秘的な境地のものであった。だが, 牧師の家庭に育った為彼女の思想の根底にはキリスト教精神と一到する数多くのものを私は認めずにはおられない。聖書中の言葉に比較しつゝ彼女の愛の本質論にさぐりを入れてみたいと思う。

旧約聖書の中に於いても多くの詩人達は

“Lord is my life!” (主はわが命である。)

と自分達の信仰を謳い, 新約聖書に於いては, ポウロが主キリストへの信仰を「生きているのは私ではない。キリストが私のうちに生きておられるのである。」

(聖書, ガラテヤ書)

と絶叫し

「わたしにとっては, 生きることはキリストであり, 死ぬることは益である。」(ピリピ書 1 : 21) (わたしの生き甲斐はキリストになりきることであり, そのためには死んでもかまわない—いやその方が益だとさえ信じています) と宣言している。このパウロの信念にも等しいものを “I am Heathcliff!” なる言葉の中にも感じることが出来る。ではこのヒースクリフとはどのような人物なのであろうか。

「嵐が丘」が Ellis Bell の名のもとに出版された時は, この型破りの小説に対しては理解者も少く, 誰の作品とも確と分らぬままに, *Jane Eyre* を出した姉

Charlotte Brontë の第二作であり而も拙い作品であるとさえ考えられていた。その誤解を解く為にこの「嵐が丘」の再版にあたり、シャーロットは Currer Bell なる名を以ってその序文を書き妹の作品であることを述べている。このように告白することは勇気の要る辛い仕事だったが姉は妹の為に敢えてこの役をひきうけてその務めを果たした。

この作品は非常に田舎くさい作品と評されていたらしい。「ヨークシャーの西部高地を御存知ない読者にとっては英国北部の荒涼たる沼地は何等興味もおありにならないことでしょう。でも妹が人物も言葉も田舎くさい荒削りの作品を書いたのは彼女がこの田舎に育ったからで、そこが素材になるのは仕方のないこと。もし都会に成長していたら都会を題材としていたであらまいしょう」と弁護し飾り気ない筆致でありのままに英口北部の人々を巧に描写している妹の作品を賞讃し、「彼女は教会内に住み余り人とは交渉を持たず、野原の散策以外に教会を出たこともないのに、彼女を取り巻く周囲の人々の風俗、習慣又家族の来歴などを非常によく知っている」と説明している。だがヒースクリフなる人物だけは血を分けた姉シャーロットにも理解し難いものだったらしい。

「ヒースクリフは救い難い人物である。」と評し、更に
“A man's shape animated by demon life.”

Editor's Preface to the New Edition of *Wuthering Heights*

(まるで悪魔の落し児のような人間だった。)と彼のことを述べている。「Earnshaw (アーンショー) が旅先から連れて来た顔も髪も真黒い少年の時代から、嘲笑しているかのように眼を見開いたまま死んで行った最後の瞬間に到る迄まっしぐらに墮落の道を進んでいった」というからには姉シャーロットの眼にも、当時の読者の多くと同じように、苛酷な復讐を果しつつ墮落してゆく鬼のような人間としか映らなかったのだろう。それでもなお彼女はやさしい思いやりのある言葉を続ける。

“Whether it is right or advisable to create beings like Heathcliff,
I do not know: I scarcely think it is. But this I know; the writer who possesses the creative gift owns something of which he is not always master--something that at times strangely wills and works for itself.”

(ibid)

(ヒースクリフのような人物を創造することが正しいことか忠告すべきことか私には分らぬ。だが私は創造力の才をもつ作家は不思議な意志力をもっていて、その力が作

家から離れて勝手に動き出すものだと知っている。)と云い、そして更に非常に美しい文で彼の批評を続けている。

“...in the latter, almost beautiful, for its heath, with its blooming bells and balmy fragrance, grows faithfully close to the giant's foot.” (ibid)
 (岩だと見れば巨人の足もとに可憐な芳香を放つヒースの花がびっしり咲いているから美しくさえ見える。)とヒースクリフの底に潜む純真な愛情を足もとに咲くヒースの花という言葉を以って表わそうとしている。

だがプロンテ自身はこのような人物を如何なる意図のもとに創り上げたのであろうか。種々様々な考察がなされているが果して姉シャーロットの述べるような墮落へと突進する悪魔像を描きただけであらうか。—そうではなかろう。絶対そうではない。エミリー特有の強い純愛の信念を表明する為にはその対象として、ヒースクリフのように純真な愛情と超人的な意志力をもつ男性が必要であったのだ。

“He wrought with a rude chisel, and from no model but the vision of his meditations. With time and labour, the crag took human shape; and there it stands colossal, dark, and frowning, half statue, half rock: in the former sense, terrible and goblin-like;...” (ibid)

(べつにモデルは無かった。作者は黙想の結果として現われたまぼろしのイメージを大きなノミで荒削りにして根気よく彫り上げただけのものでそれは巖のようにも見え人間のようにも見える巨大な陰惨な人間像であった。しかし人間として見る時、それは余りにも暴烈な悪鬼のような人間像であった。)と姉のシャーロットが言っている処を見ると上述のような私の判断に間違はないだろう。

そればかりではない。現に作者自身がこの小説の中で、はっきりと次のように言っているのではないか。

“Mr. Heathcliff is not a fiend; he has an honourable soul, and a true one.” (*Wuthering Heights* Chapter X)

(ヒースクリフさんは悪魔ぢゃありません。気高い魂、真実な魂を持った人です)と Isabella (イサベラ)の言葉を借りて、ヒースクリフを弁護しているこのアピールは作者エミリーの真実の声である。だがキャサリンもヒースクリフに超人的な半面のあることは認めていた。その証拠には、リントンの妹イザベラがヒースクリフと恋におちいりかけた時次のように忠告している。

“He is not a rough diamond-- a pearl-containing oyster of a rustic, He's a fierce, pitiless, wolfish man.” (Chapter X)

(彼は磨きをかければ艶の出るようなダイヤモンドでもなく真珠の入っているかきでもないのよ。荒々しい人間狼よ。)しかし同時に彼に純愛的な半面のあることを認めてキャサリンにこう云わしている。

“And I am his Friend.” (ibid)

(しかし、あたしは彼の友達だわ)

このキャサリンの偽らざる告白こそ彼女の本心であったのである。

さてこれからエミリー・ブロンテに依る愛の本質論についての考察をいろいろの観点から進めてゆくことにする。

“Nelly, I am Heathcliff! He's always in my mind, not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself, but as my own being. So don't talk of our separation again; it is impracticable.” (Chapter IX)

(ネリー、私はヒースクリフだと言ってもいい位よ。あの人はいつも私の心の中にいるの。いつも快感を与える人ではないけど私だって、いつも自分に快感ばかり与えないわよ。でも彼はいつも私の心の中にいるのよ。だから私たちが別れることがあるなんて二度と云わないで頂戴、ありっこないことよ。)

嵐が丘に豪農の一人娘として育ったキャサリンは父母の死後、兄ヒンドレーのヒースクリフに対する虐待の為に幼友達のヒースクリフとは普通に仲よく過すことは出来なくなった。その頃彼女はふとした機会を得て富豪のスラッシュクロス屋敷の人達と知り合いになる。豪壮な邸宅、広大な庭園、猟園を持つこの屋敷で犬にかまれた傷を治して貰う運命となり、ここで暫く過すうちに粗野な田舎くさい少女ではなくなり磨きのかかった礼儀も辨えた上流社会の娘のようになる。やがてこの家の息子 Edgar Linton の求婚を受ける。その時の本心を打ち明けるネリーに話しかける言葉であって、深い心の底に秘めたヒースクリフへの愛情の迸り出ている言葉である。こうした深い念いにも拘わらず彼女はリントンからの求婚を承諾する。

キャサリンがヒースクリフを深く愛し乍らも結婚せずに他の人の結婚の申し込みを受け入れてしまうのは非常に矛盾のように思われるが、この問題に就いては私は前々

回の論文で (idealistic love) 即ち空愛として取り上げたのでもう一度ここにそれを引用しておく。

このリントン家の後嗣であり又若くて美しいエドガー・リントンがキャサリンに求婚したのは彼女の美しい容姿に惹かれてのことであるが、彼女がこれを受けるにあたっては外見の事情だけではなく、自分一人にだけ秘めたヒースクリフへの共感と idealistic love が潜んでいたのである。

“It would degrade me to marry Heathcliff now: so he shall never know how I love him; and that not because he is handsome, but because he’s more myself than I am. Whatever our souls are made of, his and mine are the same;...” (Chapter IX)

(私が今ヒースクリフと結婚するとしたら墮落することになるでしょう。たとえば、ヒースクリフに私の思いは知らせなくても彼は私が自分以上であるよりももっと私以上に私なのよ。彼を愛しているのはあの人がかいだからとか、そんな意味じゃなくて二人は一体だからよ。私達の魂が何で出来ていようと彼の魂も私の魂も同じものなのよ。)

自分の不幸はヒースクリフの不幸であり自分の考えは彼の中で働いて居り自分のヒースクリフへの愛は岩のように頑として変らぬものであり、冬が来れば枯葉のように散っていくリントンへの愛情とは全々異質のものであって比べものにならない。「私は、ヒースクリフだ」。とキャサリンは思った。とことん逆行こうとする自分の気持を謳い上げる彼女の愛情は、作者 Emily が心の底に持つ idealistic love というものに対する徹底的な信念である。ほかの何物よりも異性間の idealistic love を貴いものだと考えている作者 Emily そのものがそこに顔を出している、だがこのように清く烈く Heathcliff を愛し乍らも彼女は Heathcliff とは結婚出来ないと言う。何故だろうか？。性愛を中心とする結婚生活はリビド (心的エネルギー) を性愛の段階に定着せしめて夫婦愛が idealistic love のレベルにまで昇華されていくのを、しばしば強力に妨げるからである。そればかりでは無い。作者 Emily やこの小説の女主人公キャサリンのようにまだ結婚しない中に、すでに異性間の idealistic love の如何に貴いものであるかを体験したことのある人には結婚して性愛のレベルにまでリビドを逆行させることは、屢々自分を墮落させる大きな危険を伴うことを知っているの、これを避けるべく決意を固くする場合がよく有るものである。 “It would degrade

me to marry Heathcliff” というキャサリンの言葉は余すところなくこの間の消息を伝えている。

又この世の一般的常識的な結婚の条件に対するエミリー・ブロンテの反撥はキャサリンがネリーに詰問される言葉の中に明確に示されている。

“I accepted him, Nelly--.” (ネリー、私は承諾したのよ)
エドガーの求婚を承諾したあと、彼女はネリーに打ち明ける。

“You must say why?...” (まあ何故でございますか。わけを仰っしゃらなきゃあ駄目ですね。)

“Well, because he is handsome, and pleasant to live with.” (Chapter IX)
(それはね、あの人は美男子で一緒にいても気持がいいもの。)

とキャサリンは答えるが、このような常識的な考え方に対して真向うからネリーは反対している。結婚というものがこのような浅薄な理由での男女の結合であるとすれば、エミリーは肯定出来ない。更にキャサリンは続ける。

“And he will be rich, and I shall like to be the greatest woman of the neighborhood.” (ibid)

(それにさ、あの人は大きな財産を受けつぐでしょう。私はこのあたりで一番金持の奥さんになりたいの。)

意気揚々と喋り立てるキャサリンに、

“Worst of all.” (それが一番いけません。)ときめつけるネリーの言葉こそ、エミリー・ブロンテの本心である。男女の結合はこのようにくだらぬものではない筈だ。ネリーは一步進めて、

“...how do you love him?”

(どの位愛していらっしゃるの?)ときくが、キャサリンの答えるような、

“As everybody loves.”

の一般的な答えでは納得出来ない。

“I love the ground under his feet, and the air over his head, and everything he touches...” (Chapter IX)

(彼の踏む土も、頭の上の空気も、彼のさわるものみんな好きよ。)

と云うような、ふんわかし^{アイマイ}た曖昧な愛し方はエミリーの肯定する愛の本質論ではない。愛というものはもっと厳しいものである。「そんなら嫁にいらっしゃい」と憤慨

したネリーは突き離してしまう。重要なのは、現在の純愛を更により貴い純愛にまで突き上げようとするファイトのある魂と魂の結び付きであり、つねに前向きの姿勢で突貫しようとする精神的な結合こそが愛の本質であった。

だからキャサリンは結婚すると決めてもなお心の中に説明のつかぬわだかまり疑問が残る。自分のしようとしていることは間違っているのではないかしら？

“Here! and here!”... “In my soul and in my heart, I’m convinced I’m wrong.” (ibid)

(ここよ、この胸の中よ、私の魂の中かしら。それとも私の心の底ででしょうか。待て、待て、せいては事を仕損ずるぞという声がきこえるのよ。)

頭の中では理屈をつけて見ても心情がこれを許さないのよ。これは取りもなおさず、このような常識的な条件で一般の人が結婚していく時、一体それでいいのかしら？結婚とはそのようなものでしかないのだろうか？という不安が残るエミリーであった。Muriel Spark は、これを次のように評している。

“To the extent that, she universalised every relationship between man and woman which she touched, she was unrealistic.”

(Emily Brontë—Her life and work)

(エミリーの扱う男女の関係は現実的でない処までいっている)

又 Clifford は、

“...their love is the opposite of love conceived as social and conventional acceptance, the love that Catherine has for Edgar which has only her consciencious approval.” (Norton Critical Editions)

(キャサリンとヒースクリフとの愛は—これのみをエミリーが良心的に支持するその愛は一般的な常識的な受け取り方とは凡そ正反対のものである。)と述べている。

又、Muriel Spark はエミリーの結婚観が非常識であるのは、

“So far as Emily is concerned, she appears to have been a born celibate.”

(エミリーだけについて云うならば、彼女は生れ付いての独身主義者であったようである。)と云い、

“The most precise definition might be she was a passionate celibate.”

(彼女は独身主義者であるとしても情熱溢れる独身者である。と評するのが一番適切だろう。)と云っている処が面白い。彼等にとってエミリーは神経症的な潔癖家かヒ

ネクレ者でしかなかった。それは、これらの批評家が近代の実存思想について全く無知であり、随って彼等は現存在と実存との区別を知らないからである。

エミリーのもつ愛の純粋性は神聖な域にまで高められた精神的なものであって、中途半端な生まぬるいし物ではなかった。これについては聖書ピリピ書に、

“But now in union with Christ Jesus who once were far off have been brought near shedding of Christ’s blood.” とある。血を流し給うたキリストと一体であることにより神と一つであるとの信仰を得たパウロは勇氣を得て大力のキリスト者となり、燃え立つ祈りと共に見知らぬ地へと海外伝導に出かけてゆく。

底知れぬ勇気の奮いおこるのはキャサリンとて同じこと。“I am Heathcliff” 彼と私は一体であるとの信念のみが彼女を支えていた。（豊田実博士の註釈によれば一心共同体ではない、異体同心とも云うべきだとあるが）荒野を駆けめぐり月を仰ぎ星を眺め岩に腰を下ろして、自然に包まれて独坐黙想したキャサリンには純愛的な半面と更にこれをより高いレベルにまで間断なく突き上げようとする超人的な意欲的な半面があった筈である。自分を現存在のレベルから inch by inch でイエスの高さにまで近づくとする根性のある意欲的な半面があった筈である。そのようなエミリーがもしも大金持ちの家へ嫁入りしてノンベンダラリとした暮らしを始めたとしたら、どんなことになっただろうか。

“...I had been converted at a stroke into Mrs. Linton, the lady of Thrushcross Grange, and the wife of a stranger: an exile and outcast, thenceforth from what had been my world...”

(*Wuthering Heights* Chapter XII)

（とたんに、私はスラッシュ・クロス屋敷の奥さん、そして見知らぬ人のお嫁さんになってしまったのよ。今までの私の世界から追い出され追放されてしまったのよ。）ということになってしまった。

勿論表面的には何不自由ない穏やかな平和な新生活ではあったが、どうしてもない彼女の魂の不安を救ってくれたものは何であつたろうか。それは、私は彼とは異体同心なのよとまで言い切ろうとする彼女の意欲的な根生であった。幼い時から一緒に育ったヒースクリフには宿命のようなもの迄感じていた。二人が離れるなんてことは考えられなかった。彼女はニーチエと同じようにその宿命を愛したのである。

だが実際問題として二人は今離れ離れになっている。ヒースクリフは行方不明になってしまって彼の消息を知る術もなかった。

“Here she burst into uncontrolable grief and the remainder of her words inarticulate.” (Chapter IX)

(彼女は悲しみを抑え切れなくてワッと泣き崩れてしまいました。そして後は自分が何を云っているのかよく分かりませんでした。)

“It would degrade me to marry Heathcliff now.” とキャサリンがネリーに打ち明け話しをしている処を半分盗きいたヒースクリフはその言葉を誤解したまま家を出てしまったからであった。その夜のキャサリンの歎き、雨に打たれびしょ濡れになって彼の行方を探し求めたのだった。

フロイドが快不快の原則を超えて上昇しようとする不屈の魂をもつ人間のあることに気がついたのはエライなあと思はう。

自分の体を引き裂かれたような痛みと悲しみに打ちひしがれたキャサリンはヒースクリフの魂を追い求める。この悲しみはヒースクリフとて同じことであった。双生児は一方の足が痛めばその片割れも同じ処が痛むという。外国に居る間中ヒースクリフの心はキャサリンの為に苦しんだのであった。

“I have fought through a bitter life since I had heard your voice; and you must forgive me for I struggled only for you!” (Chapter X)

(あの時の君の言葉を聴いてから僕は本当に苦しみ抜いて来たんだよ。しかし君を思う一念で闘って来たんだから僕を許して呉れ給え。)

2年後のヒースクリフの告白のなかに聞かれる言葉であるが、キャサリンの心の中に常に居るヒースクリフであり、又ヒースクリフの心の中に常にいるキャサリンであった。

“Where is he?” “Where he can be?”

“Where is she?” “Where are you?”

相求める二つの魂の呼び求める声は全篇を通じてこだまの様に繰り返されている。

突然のヒースクリフの出現、リントン家の訪問は苦しみの果ての再会だけに二人の喜びは大きい。

“They were too much absorbed in their mutual joy to suffer embarrass-

ment.” (Chapter X)

(二人はお互の喜びに夢中になって、きまりの悪いことも忘れてしまいました。) だが作者のエミリーはこの再会に幸福を与えていない。帰国後のヒースクリフは嵐が丘に陣取り時折リントン家を訪れてはキャサリンとも

“.... sauntered on with Mr. Heathcliff.” [Chapter X]

散策出来るが、彼の突然の出現によるショック、夫リントンとの間にはさまれた苦しみと夫の妹イザベラのヒースクリフに対する関心と、重なる心労の末キャサリンは遂に病床につく。

病床での彼女はネリーを掴まへては話しかける。その折にもヒースクリフのことをいつも念頭において一人だけではあの世には行きたくないを考える。

“But Heathcliff, I'll not lie there by myself; they may bury me twelve feet deep, and throw the church down over me, but I won't rest till you are with me. I never will.” (Chapter XII)

(あたしはあそこに一人で埋められたくないの。たとえ皆が12フィートも掘って教会をその上に倒してその穴を塞いでもあたしはあんたが来る迄は安心しないわ。どうして安心するものですか。)

やがてキャサリンの病氣も重くなり臨終近くなる。その際のキャサリンの激情に満ちた言葉、それに応ずるヒースクリフの言葉に耳を傾けよう。愛は一方的なものでは成立しない。応答あってこそそのものである。我々の信仰にしても我々の願いに答え給う神があり、又その神の召命に応ずる我々があってこそ信仰は成立するのである。激しい火を吐くようなキャサリンの愛の叫びに応えるヒースクリフも愛の信念に燃えている。その信念の強さに於いては一步もひけをとらず、又辛抱強さに於いても誰にも負けることがない。

現在のレベルにとどまろうとする人々に対して烈しい魂をぶっつけたヒースクリフは恋愛に於いても無限に現状を超えていこうとする不屈の魂の把持者であった。キャサリンとヒースクリフと相呼応する二人の超人的な面魂をつくづくと眺めるのはなかなか興味深いものである。キャサリンの曰く

“My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath; a source of little visible delight, but necessary.” (Chapter IX)

(ヒースクリフに対する私の愛は地に埋った永遠の岩にも似て目に見える喜びは少ないけど、なくてはならないものなのよ。)

聖書の中にも「エホバは我が岩」という語があるが岩にも似た愛とは如何にがっしりした変りのないものであるかとの信念の程もうかがえる。これに対してヒースクリフは、

“You suppose she has nearly forgotten me?”

he said. “Oh, Nelly! you have known she has not.” (ibid)

(あんたは、彼女が僕のことを殆ど忘れてしまっただろう等と思っているの？彼女が僕を忘れていないことは、よく見れば分るぢゃないの。)

と更にも増して強い自信である。

“If he loved with all the powers of his puny being, he couldn't love as much in eighty years as I could in a day.” (Chapter XIV)

(もしエドガーがああ貧弱な体で力一杯愛してみた処で彼の80年間の愛情が僕の1日の愛情にも及ばはしないよ。)

何と強い自信の程だろう。“I am Heathcliff!”なる信念もキャサリンからの唯の一方的なものだけでは重みもないが、ヒースクリフからのかかる頑とした裏付があってこそだと私は思う。

ヒースクリフは大股に彼女の病床に近づくと叫哭する。

“Oh, Cathy, Oh, my life!” How can I bear it?” (Chapter XV)

(おゝ、キャシー、君は僕の命だ。別れられてたまるもんか。できっこない相談だ) “Lord is my life!” 主はわが生命である。旧約聖書の詩人達はうたっている。「キャサリンこそわが命」ヒースクリフの信念もキャサリンのもつ信念と全く同じものである。自分の思いは相手のヒースクリフには知られなくてもいいと思っていた様な少女時代の控え目な態度は死を目前に控えたキャサリンにはもはや許されない。力の限りに声をふり絞る。渾身の力を出して叫ぶ彼女の訴えはヒースクリフの心をかきむしる。

“You have broken my heart, Heathcliff! You have killed me, and thriven on it.” (Chapter XV)

(あなたが私の心を悲しみに突き落したのよ。あなたは私を殺したのよ。私を殺してあなたは元気になって。)

“I shall not be at peace... I am not wishing you greater torment than I have, Heathcliff. I only wish us never to be parted...” (Chapter XV)
(私は安らかに死んでゆくことなんか出来ませんわ。……あたしが苦しんだ以上にあなたを苦しめたいなんて、あたしは思っていません。たゞいつ迄も別れたくないだけなの。)

“Why did you despise me? Why did you betray your own heart, Cathy? I have not one word of comfort, You deserve this. You have killed yourself.” (ibid)

ヒースクリフは答える。

(どうして僕を軽蔑したんだ。どうしてあんたは自分にうそをついているんだ。僕はあんたを慰める言葉なんか一つもない。あんたはそれでいゝんだ。あんたは自分で自分を殺したんだ。)

“You loved me--then what right had you to leave me? I have not broken your heart. ---You have broken it.” (Chapter XV)

(あんたは僕を愛していたのに何の権利で僕から離れて行ったのだ。僕はあんたの心を悲しみに突き落したことがありますか。あんたは自分で失恋したんだ。)

You have broken my heart. キャサリンの責めに対して一步も退くことのないヒースクリフの答である。

“I forgive what you have done to me. I love my murderer--but yours! How can I?” (ibid)

(あんたは私に対してしたことは赦してあげる。だが私の心を殺してしまったあんたは赦せても、あんたの自分の心を殺してしまったあんたなんかどうして愛することか出来ようか。そんなことは出来ないんだ。)

豊田実博士の註によれば「お前の下手人は赦せない」とあり「ヒースクリフの愛の原理の極致を示すものだ」と述べられている。

“Heathcliff, I shall die, I shall die.” (Chapter XV)

「ヒースクリフ、あゝもう死ぬわ」彼女は彼を離すまいと必死に叫ぶ。

“I wish I could hold you, till we were both dead!” (ibid)

「私達が二人とも死んでしまう迄あなたを離したくないわ」とキャサリンは喘ぎ、肉

体のヒースクリフと一緒にあの世に連れていくことは出来ないのだから私の魂の中にあるヒースクリフを連れてゆくのだと云う。(…take him with me; he's in my soul.)なのである。

“I only wish us never to be parted; and should a word of mine distress you, think I feel the same distress underground.” (ibid)

(私の云って居ることがこれから先あなたを悲しませることがあったら私も地下で同じように悲しんでいるものと思って下さい。)

“How strong you are! How many years do you mean to live after I am gone?” (Chapter XV)

(あなたは何んて強いのか？私が死んだ後何年生きるおつもりなの？)

“I will haunt you.” (お化けで出るわ。)の言葉を残してキャサリンは死んでいく。キャサリンに魂をあつ世へ持っていかれたヒースクリフはこの世で生きた屍も同然であるが、頑丈な体はなお20年を生き続ける。喜びのない20年間である。

“Do I want to live? What kind of living will it be when you oh, God! would you like to live with your soul in the grave?” (ibid)

(僕は生きたいなどと思ってイヤしない、あんたが死んでしまったら僕の生活はどうなるんだ。愛する人が死んでしまっからもお生きたいなんて思うもなか)

彼の心に潜むものは只キャサリンへの憧れだけであった。ロックウッドが嵐が丘の彼女の使用した部屋に泊めて貰った時、「入れて」「入れて」というか細い少女の声を窓外にきいて狼狽する場面がある。

“I tried to draw back my arm, but the hand clung to it, and almost melancholy voice sobbed, Let me in---let me in.” (Chapter III)

その部屋にロックウッドが泊っていたことを知ったヒースクリフの怒り、これは大切なキャサリンの部屋だったのであるから誰も泊めるわけにはいかぬ部屋だった。又亡霊を求めて泣き叫ぶ狂気じみた彼の悲歎のうちに夜は明けていく。

“... thundered Heathcliff with savage vehemence.” and he struck his forehead with rage...” Cathy, do come. Oh, do...hear me this time.”

(Chapter III)

(ヒースクリフはもの凄いい剣幕でそう言った。激怒のあまり自分の額を打ちつけて…)

「おゝ、 キャシイ、 入って来ておくれ、 今度こそ私の頼みをきいておくれ」

“It is twenty years,” mourned the voice, “twenty years. I’ve been a waif for twenty years!” (Chapter III)

(「20年間ですよ。私は20年間待っていたのですよ。」亡霊は呻く)

20年間もの長い間キャサリンの霊は彼に呼び続け、彼はそれに悩まされ続け乍ら生きながらえて来た。この試練によく耐えたヒースクリフはやがて体の衰弱と共に恍惚状態となり食事も取らぬまゝ、眼はカッと見開いたまゝ天の一角を仰ぎつつ死んでいく。遂に許された彼の死であった。遂に彼女の許に行くことが出来る。愛を全うすることの出来たヒースクリフの死は見た眼は恐しくとも神々しい迄の死である。彼の果たした復讐の数々もこゝに於いて許されることが出来るであろう。

ヒースクリフは何故キャサリンの死後20年もの永い間ひときれの木片「a waif」となって荒天の怒濤の間を漂いつづけたか。それが彼の運命であり、その「宿命を愛する者」で彼はあったからである。〴〵人その友の為に生命を捨つる。これより大なる愛はなし。」とキリストは説かれた。惜しみなく与える一己れの命までも惜しみなく与える愛でなければ本当の愛ではない。しかし、われらは、われらの生命の瞬間におけるわれらの現状（現存在）からの脱皮を重ねて、われらの愛をより真実な、より高い愛にまで突き上げ突き上げて行こうとする熱意を持たなくては、惜しみなく与えつけて、終には命までも投げ出すことは出来ない。キリスト者は、すべての人を愛するキリストの半面には荊の冠をかぶって苦悶するキリスト—巨石のごとく Stand by して人々の罪を背負いながらその重圧に耐えようとする苦悶のキリストのましますことに注目しなければならない。「キリストに倣え」と号令するのは結構だがエミリー・ブロンテの場合のように、これに耐える覚悟なくしてキリストに倣うことは到底できっこない。われらの現状（現存在）にとどまることを勧奨する如何る誘惑もこれを排除して上昇するために必要なふしぎな精神的なエネルギー（覚悟）を授けて、われらを自覚存在（実存）にまで引き上げてくれる者が宗教というものでキリスト者の場合は、それがキリスト教である。

もしも、ある宗教の現状がそのエネルギー（覚悟）を与えうる実力のない無力なものであるならば、その宗教は忽ちその存在の理由を失くして、生ける屍となり他の宗教又は新興宗教によって取って代わられるであろう。目に見えない“little visible 聖なる価値に近づくための難行苦行、しかも日々自分の作ったレコードを更新しようと

して努力することが人生を荘厳する (sublimate) という貴いレッスンをエミリー・ブロンテはこの小説をとおして、私に与えてくれた。

又キリストは無償の愛を説かれ、身を以ってその愛を私共に示された。ヒースクリフもキャサリンの為に身を捧げているが何ら得るべき報酬もない。彼女はヒースクリフとは結婚してくれなかったのであるから、彼は愛する人とは生活を共にすることは許されなかった。又再会出来たとしてもその喜びも束の間であっけなくキャサリンは死んでしまうのであるから実には得る処のない愛であるが、それでもなお彼女のもとに行くことのみを生き甲斐として生き続け遂に歓喜に溢れて死んでいくのであってその愛は死を超えて完成される。

まさにヒースクリフこそはエミリー・ブロンテの胸の中に育まれ大事にされて創造された巨大な人間像であってブロンテの深い愛の信念の彫り込まれたその像は、シャーロットが言っているような荒い粗末なのみで彫り上げたものでは決してない。姉シャーロットもここ迄はヒースクリフを理解することは出来なかったが、このヒースクリフこそはエミリー・ブロンテの息の通うものであり、“I am Heathcliff!” なる信念に燃えた言葉と共に作者エミリー・ブロンテの信ずる愛の本質を象徴するものとしてヨークシャーの荒野に永遠に残る像であると信ずるものであります。

又エミリー・ブロンテが彼につけた名前が、ヒースクリフ。 Heathcliff. まさに足もとにヒースの花の咲き匂う岩、「エホバわが岩、わがあがぬい主よ」昔の人々のエホバに捧げた信仰にも似て「私の岩」とは何と力強い表現であろう！

“My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath.”

彼女の愛の image をこのヒースクリフに托している処に私は深い共感を覚えるものであります。

参 考 書

Wuthering Heights

With a preface and memoir of Emily and Anne Brontë by
Charlotte Brontë (London, Oxford University Press)

Wuthering Heights

An Authoritative text with Essays in Criticism
by William M. Sale, Jr. (Norton Critical Editions)

Emily Brontë her life and work

by Muriel Spark and Perek Stanford
(London, Peter Owen Limited)

Wuthering Heights 註 豊 田 実 (研究社)

Emily Brontë

by A. Mary F. Robinson (研友社)